

# 会派視察・研修報告書

会派名 市民の会

代表者名 仙石 三喜男

1 日にち	令和 6年 7月 29日 (月) ~ 30日 (火)
2 視察先 研修名、主催者及び会場	全国市町村国際文化研修所 (JIAM) 研修名：令和6年度 第2回 市町村長等・議会議員特別セミナー
3 参加者	仙石 三喜男
4 調査・研修の テーマ	「地方行財政」というテーマのもと、各分野で活躍されている話題の講師の講演により、現代社会を捉え直すとともに今後のわがまちの未来等を考える。
5 主な内容	① 曖昧な弱者とその敵意～社会分断の新たな構造～ ② 「ともにいきる」未来につなぐ みんなでつくる「健康しが2.0」 ③ 「労働供給制約社会」への処方箋 ④ こどもたちの生きるちからを育む～「COLOMAGA プロジェクト」の活動の軌跡～
6 所感、提言事項、課題等	<b>【議員氏名】</b> 仙石三喜男 現在活躍されている4人の講師の方々の講演を聞く機会となり、今後のまちづくりの参考になる大変興味深い研修でした。今回の講師4人の中、③の講義は、多治見市出身のリクルートワークス研究所 主任研究員 古屋星斗（しょうと）氏（38歳）が含まれており、期待と関心を持って研修に参加しました。  ① 講座 最近の事例から、弱者には、コロナ禍での飲食店叩きや生活保護バッシング等の背景にある「曖昧な社会的弱者」、女性・子ども・高齢者・障がい者などの「明白な弱者」の2種類の弱者が発生し得る時代となっていることがわかる。また、なぜ自分たちを助けてくれないのかと疑問を抱く現役世代も「曖昧な弱者」の対象となり、これら弱者への対応によっては、新たな社会分断を生む危惧がある。これら2種類の弱者への対応には、2面作戦が必要であり、「曖昧な弱者」には対応すべきだが、「明白な弱者」への対応をおろそかにしてはならないということを学びました。

6 所感、提言事項、課題等

② 講座

滋賀県知事 三日月 大造氏から、衆議院議員 10 年及びその後の滋賀県知事 10 年の経験を生かした、現在の滋賀県の政策の内容について紹介していただきました。

滋賀県は、琵琶湖が県の面積の 1 / 6 を占め、琵琶湖を活かしたまちづくりを進めており、氏は、53 歳の若さで、対話を重要視した現場主義の県政運営に邁進されている。

特に子ども政策には熱心で、コロナ禍で生まれた「すまいるあくしょん」（笑顔を増やすための 7 つの行動指標）、2028 年に開校を目指す、県下初となる高等専門学校（県立高専）の設置を進め、交通ビジョンと財源づくりの政策では、新たに「交通税」の検討をするなど、新しい政策にもしっかりと取り組まれています。県民としっかり向き合う政治スタンスの県知事であると感じました。

滋賀県職員の志（パーパス）※は、知事からではなく、職員からの提言であり、「県民 140 万人と共に頑張ろうの精神！」をうたうものでした。

※滋賀県職員の志（パーパス）：『琵琶湖とくらしを守る。三方よしで笑顔を広げる。豊かな未来をともにつくる。』

③ 講座

「労働供給制約社会」への処方箋は、現在 38 歳の若い多治見市出身の講師 古屋氏によるもので、貴重な莫大なデータにより、今後人口が減少する中、この数年に社会の仕組みをいかに見直すかが最大のポイントであるとの強いメッセージを発信されました。

今後予測される人口構成を含め、現状の働き手不足を考えると、日本社会は全く新しい局面に突入しつつあり、日本社会を持続するための打ち手をしっかり講じることが、今後数年の間に求められる。

単なる「人手不足」ではなく、景況感や企業業績に左右されず、労働供給量がボトルネックとなる「労働供給制約」が日本社会にやってくる。各種のデータからも、高齢者の労働需要は多い一方で、担い手ではなくなり、その結果労働供給制約が発生するとの見解でした。

提案としては、「10 年の猶予」の間に、構造的な打ち手を検討し実施することであるとのことでした。

④ 講座

未来の伊豆をデザインする子どもたちとプロが創る情報誌「KURURA」（発行 1 号/年）の製作を通して、今の子どもたちの人材育成を行い、それが 5 年後・10 年後の地域の未来を創ることにつながることになるという活動紹介でした。多治見市においても、子どもへの息の長い人材づくりが求められていることを痛感しました。

<p>7 写 真 等 ※視察の場合は必須、研 修の場合は任意</p>	
--	--

※視察先、研修先ごとに1枚作成すること。

※「6 所感、提言事項、課題等」は、参加者全員分を記載すること。